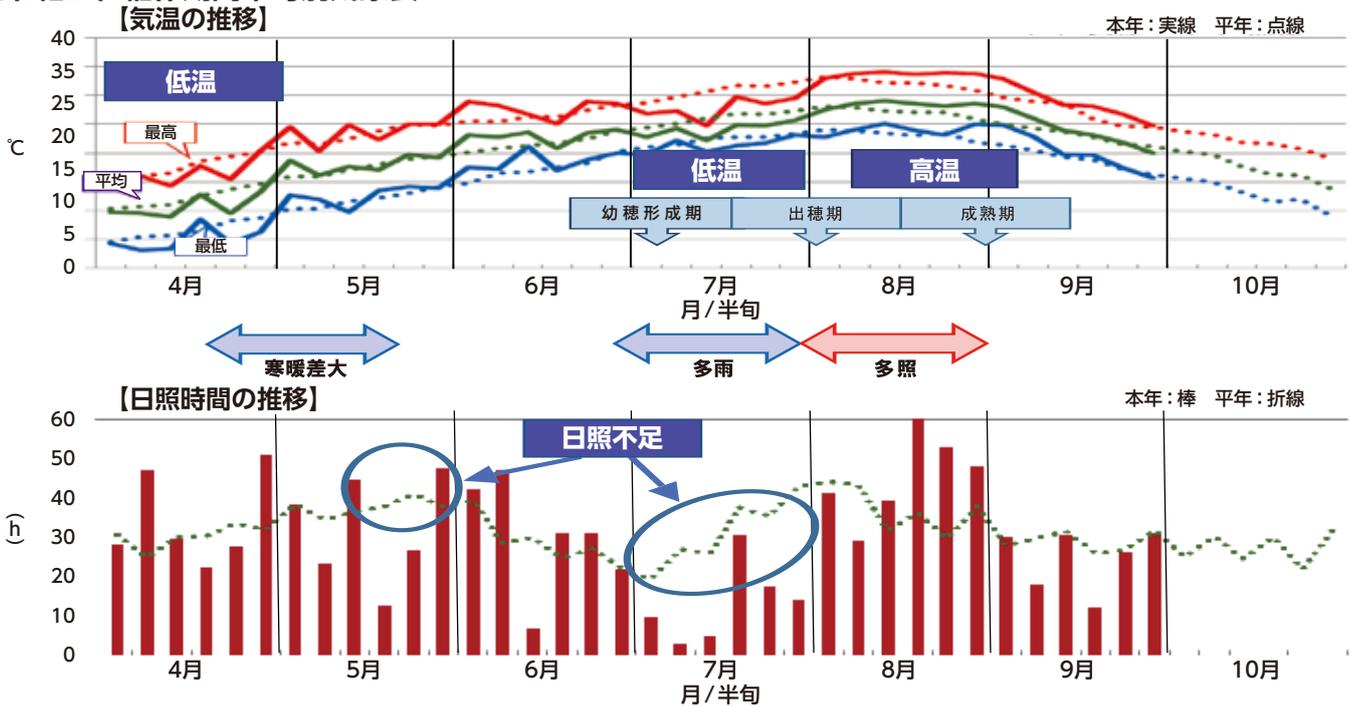




令和2年 水稻の生育と品質概要

4月	低温により育苗期間中は生育が遅れ、苗丈は短くなりました。
5月	中旬は最高気温が低く、日照不足により初期生育は緩慢となり分けつは抑制され茎数が少なくなりました。土壌還元障害・藻の発生した圃場が多く見られ、相談が多く寄せられました。
6月	上旬の日照時間と上中旬の高温により分けつが促進されましたが、再度中旬の日照不足により分けつ増加は緩慢となりました。中干し後の雑草では「ヒエ」「クサネム」「ヒレタゴボウ」について発生が目立ちました。(令和3年産 水稻・麦・大豆 栽培手引きP27参照)
7月	全般に低温・日照不足となり、光合成が低下した関係で無効分けつが抑えられたことで葉色が濃く推移し、「みずかがみ」「コシヒカリ」等の早生品種では、平年より2~3日遅い出穂となりました。この時期「葉いもち」の発生が認められ、ところにより「穂いもち」の被害にもつなりました。
8月~9月	8月に入り天候が一転し、最高気温・最低気温ともに高く推移し日照時間も十分であったことから「みずかがみ」「コシヒカリ」等の早生品種は、出穂後約30日程度で収穫を迎えました。心配された台風が直撃することはありませんでしたが、コシヒカリでは8月中旬からの数回の雨により比較的早くから倒伏が認められました。害虫では全域的にカメムシ類の発生が多く、品質に影響を及ぼしました。近年、発生量が多くなかった「コブノメイガ」「トビロウカ」の飛来により登熟阻害や坪枯れが発生しました。早生品種の収量は平年並みからやや少なく、くず米は少ない傾向となりました。「日本晴」「秋の詩」等の中生品種は、収量は早生種と同様であったが、登熟期の高温が影響し更に、病害虫等の多発により品質が安定せず、心白粒・腹白粒・背白粒・着色粒が目立ちました。

■令和2年 稲作期間半旬別気象表 (虎姫アメダスより)



令和3年産 重点技術対策

- ① 土壌pHに応じた土づくり資材の連年施用。
 - ② 細植、植付深3cm、苗の活着まで、および低温時は深水管理とする。
 - ③ 活着後、浅水管理により昼間の温度を高め分けつ促す。
 - ④ 田植後2週間で還元障害(やみ田)有無を確認する。
 - ⑤ 中干し前に自然減水で、土の中に酸素を取り込む事による還元障害の防止。
 - ⑥ 目標茎数の8割になったら、中干しを行う。
 - ⑦ 高温時における登熟期の栄養不足を回避するため、穂肥は適期に適量を施用する。
 - ⑧ 出穂前後3週間は常時湛水とし、収穫5日前まで間断かんがいをを行う。
 - ⑨ 適期収穫の励行と適正な乾燥調製により、品質を確保する。
 - ⑩ 水稻収穫後、土づくり資材を散布し、秋耕はすぐに行う。(有機物を深く鋤きこまず、浅く耕す)
- ※圃場を観察し、病害虫発生状況の確認を行う。